

「イラクの自由」作戦の米軍のトランスフォーメーションに対する影響

菊地 茂雄

はじめに

2003年に行われた「イラクの自由」作戦（以下、「イラク戦争」）は多くの点で米国の軍事力の進んだ面を示した。ドナルド・ラムズフェルド国防長官は、イラク戦争の教訓に関する上院軍事委員会公聴会において、①敵が防御を行える前に打撃を行う作戦の「スピード」、②真に統合された戦力として米軍が戦ったという「統合」、③迅速に行動することを可能にした「情報」、④非戦闘員などへの付随的被害を極小化しつつ、敵に壊滅的打撃を与える「精密交戦能力」の4つをイラク戦争の教訓としてあげている⁽¹⁾。これらがイラク戦争で重要な役割を果たしたことは間違いないであろう。

他方、研究機関や専門家からはイラク戦争に関するまとまった研究がすでに出版され、作戦に参加した米軍によってもイラク戦争に関する報告書も公表されるようになっていく⁽²⁾。それらの中で、イラク戦争の実態と教訓については、当初の一般に抱かれていたイメージと異なるような事実も指摘されるようになっていく。本稿では、これらの論点を明らかにするとともに、極力、軍による資料や一般の研究成果などさまざまな資料に照らし合わせて、その妥当性も検討してみたい。ジョージ・W・ブッシュ政権による公式な説明を調査することが不可欠な作業であることはもちろん、それを踏まえつつも、異なった見解も検討することで、イラク戦争に関する理解を深めることができるのではないかと考えるからである。

1 イラク戦争における勝利とイラク軍崩壊の原因をめぐる議論

(1) 勝利の原因に関する解釈について——米軍の優位か、イラク軍の弱さか

-
- (1) Donald H. Rumsfeld, “Prepared Testimony by U.S. Secretary of Defense Donald H. Rumsfeld” (Senate Armed Services Committee, Washington, DC, July 9, 2003), <http://armed-services.senate.gov/statemnt/2003/July/Rumsfeld.pdf>.
- (2) 例えば、米陸軍の研究報告書 *On Point* がある。これは、2003年4月30日に着手され、「イラクの自由」作戦研究グループにより実施された研究を基に、2004年1月に完成された。Gregory Fontenot, E. J. Degen and David Tohn, *On Point: The United States Army in Operation Iraqi Freedom* (Fort Leavenworth, KS: Combat Studies Institute Press, 2004).

イラク戦争において、米軍側が迅速かつ低コストで勝利を達成できた原因を何に求めるかという問題は、同戦争からどのような教訓を導き出して今後どのように適用するかを考える上で中心的な命題である。

米陸軍戦略大学戦略研究所準教授のステイブン・ビドル(Stephen Biddle)は、多くの論者はイラク戦争における低コストの勝利の原因を、作戦のスピード、精密打撃と状況認識能力、統合などに求めるが、それだけでは説明が付かないと指摘する⁽³⁾。ビドルは、特に、先進的な技術と兵士の優れた技量(および両者のシナジー)という米軍が持つ強さと、イラク軍の弱さの相互作用に着目する⁽⁴⁾。ここで彼が言うイラク軍の弱さとは、①訓練不足による射撃技量の極端な低さ、②敵の強所を攻撃するような自滅的な戦術(開闊地において援護射撃・煙幕・地形の活用なしに、重装甲車両に対して一般車両により正面突撃を仕掛ける。市街戦においても屋外に出てきて攻撃を仕掛ける。また、比較的脆弱な補給線ではなく戦闘部隊を攻撃するなど)、③将校の質、④装備の稼働率の低さ、⑤防御陣地構築技術の低さ(都市地形を活用せず、外からわかりやすい場所に構築するなど)、⑥市街地戦闘の訓練を受けておらず、その技量が低かったこと⁽⁵⁾などである⁽⁶⁾。そして、こうした弱点により、イラク軍は米軍の優位に対して一層脆弱になったとビドルは指摘する。つまり、イラク軍は米軍が攻撃しやすい目標に自らがなる一方、市街戦などでより一層の出血を米軍に強いるようなこともしなかったわけである。逆に、イラク軍のレベルが実際よりも高く、米軍の弱点を衝くような行動を行ったとしたら、勝利を達成するには時間がかかり、米軍側の損失は高くなっていたであろうとビドルは指摘する⁽⁷⁾。

これに対して、米陸軍が実施したイラク戦争に関する研究の報告書 *On Point* は、イラク軍は、戦力の隠蔽、防御地形の選択、戦力の機動などで、能力を発揮したと指摘する一

(3) Stephen Biddle, "Statement by Dr. Stephen Biddle Associate Professor of National Security U.S. Army War College Strategic Studies Institute before the Committee on Armed Services United States House of Representatives First Session, 108th Congress on Operation Iraqi Freedom: Outside Perspectives" (October 21, 2003), <http://www.house.gov/hasc/openingstatementsandpressreleases/108thcongress/03-10-21biddle.html>; Stephen Biddle, et al., "Iraq and the Future of Warfare: Implications for Army and Defense Policy" (Carlisle Barracks, PA, August 18, 2003), <http://www.house.gov/hasc/openingstatementsandpressreleases/108thcongress/03-10-21warcollege.pdf>.

(4) Biddle, "Statement by Dr. Stephen Biddle," p. 5.

(5) 正規陸軍と共和国防衛隊は市街地戦闘の訓練を受けておらず、特別共和国防衛隊のみ受けていたが、それも質の低いものだったという。また、フェダイーンにいたってはそもそも正規の軍事訓練を受けていなかった。*Ibid.*, p. 6. また、市街戦の技量の低さについては、建物内部に仕掛け罠などを設置しなかった、防御陣地を屋外の見えるところに設置した、障害物・地雷などを設置しなかったなどが挙げられている。*Ibid.*, p. 16.

(6) 以上の点については、Biddle et al., "Iraq and the Future of Warfare," p. 17; Biddle, "Statement by Dr. Stephen Biddle," pp. 5-6.

(7) Biddle et al., "Iraq and the Future of Warfare," p. 18; Biddle, "Statement by Dr. Stephen Biddle," p. 8.

方⁽⁸⁾、バグダッドで行われた市街戦については、損害は歴史的にみて少なかったことを認めつつ、イラクの対応次第では損害はもっと多くなったであろうと指摘する⁽⁹⁾。

(2) 麻痺か撃破か——航空攻撃の役割

開戦当初に敵指導部中枢などに対して集中的な攻撃を行うことにより、敵を麻痺させ、抗戦の意志をくじき、自らの損害も極小化しつつ目標を達成することが可能か、という問題については米国でも議論されてきた⁽¹⁰⁾。また、報道などでも、「衝撃と畏怖」作戦として、イラク戦争はまさにこの典型的な事例であるという主張もなされてきた。

これに対して、ビドルは、イラク軍が激しい航空攻撃や急速な連合軍の進軍によって麻痺したわけではないとして、イラク軍の対応について次のように指摘している。①民間人に偽装した斥候や衛星電話、地上線、伝令などによる情報網が機能しており、米軍の進撃の様子は軍上層部に報告されていた、②共和国防衛隊4個師団の一部をあらかじめ米第5軍団の進軍ルート上に展開し得た、③ナジャフやナシリヤにおいてフェダイーンなど準軍隊部隊による増強が行われ、米軍に対する攻撃を実施した、④バグダッド、バスラなどの都市を攻略した際も抵抗が継続した⁽¹¹⁾。また、航空攻撃による損害も大きく、逃亡したイラク兵も多かったが、他方で戦い続けた者も多く、航空攻撃に生き残ったイラク兵数千名は他の米軍の目標上に展開し、抵抗を続けたと指摘する。以上から、ビドルは、イラク軍が航空攻撃や進軍のスピードにより麻痺したわけではないと主張する⁽¹²⁾。

この点については、*On Point* は同様の見方を示し、開戦初頭の航空・ミサイル攻撃により、イラクの戦略・作戦レベルの通信は破壊されたが、イラク軍はその後も単純な命令方法を活用して機動を行い、戦闘を継続することができたと指摘した。そして、戦闘に負け続けたものの、イラク軍は、ネットワークを破壊されたが故に戦いを放棄することはなかったと結論付けている⁽¹³⁾。一方、中央軍司令官としてイラク戦争を指揮したトミー・フランクス (Tommy Franks) 陸軍大將も、1個師団程度の地上軍と強力な航空支援によ

(8) Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, p. 383.

(9) *Ibid.*, p. 391.

(10) Arthur K. Cebrowski and Thomas P. M. Barnett, "The American Way of War," *United States Naval Institute Proceedings*, vol. 129, iss. 1 (January 2003), pp. 42-43.

(11) Biddle et al., "Iraq and the Future of Warfare," pp. 7, 8; Biddle, "Statement by Dr. Stephen Biddle," p. 2. 特に、第3歩兵師団第2旅団がバグダッド市街中心部への突入作戦「サンダーラン」を行った際もイラク側は激しい抵抗を示した。4月5日のサンダーランでは、参加したほとんどの車両がRPGに被弾し、7日の2度目のサンダーランでは、さらに激しい抵抗を示し、米軍が去った場所を再占拠、後続部隊と交戦し、後からやってきた補給部隊にも戦死者2名、トラック3台などの損害を与えたという。Biddle et al., "Iraq and the Future of Warfare," p. 8

(12) Biddle, "Statement by Dr. Stephen Biddle," p. 2.

(13) Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, p. 418.

り、容易にバグダッドを占拠できるという考えを持つ者が国防省内にもおり、こうしたばかげた考え方を払拭しなかったと述べている⁽¹⁴⁾。

仮に航空攻撃によりイラク軍が麻痺したのではないとすると、ではそもそも航空攻撃は何を目的としていたのであろうか。この点について、ハワード・ビロート(Howard D. Belote)空軍大佐は、イラク戦争における航空作戦は敵を麻痺させることを主目的にしていただけではなく、イラク軍の中心である共和国防衛隊を撃破するためのものであり、それはまさに敵から戦争を遂行する能力を奪うための古典的な消耗戦であったと指摘する。特にイラクの防空網を破壊した後は、共和国防衛隊などの敵地上軍の破壊に目標が移り、4月2日および3日の1,300ソーティのうち80パーセントは共和国防衛隊を目標にしており⁽¹⁵⁾、戦争全体を通じて攻撃目標の82パーセントは地上戦闘に関連していたという。ビロートは、共和国防衛隊こそがフセイン体制を、政治的にも、軍事的にも下支えしてきたものであり、クラウゼビッツの言う「全てがこれによって決定される全ての力と運動の中心」たる「重心」⁽¹⁶⁾であると指摘する。そして、バグダッド陥落のシーンを見て、フセイン政権は麻痺したと考える向きもあったが、麻痺したのではなく、バグダッド近郊においてもすでに航空攻撃によって残存戦力は破壊されており⁽¹⁷⁾、抗戦する能力を奪われたと見るのが正しいと述べた⁽¹⁸⁾。

同様に、ウェズリー・ホールマン(Wesley P. Hallman)空軍少佐も、地上軍撃破に最大の力点が置かれていた点で、イラク戦争は湾岸戦争と大きく異なると指摘する。彼によると、敵地上軍に対する攻撃は、湾岸戦争では航空作戦における5つの目標のうち5番目のものとして位置付けられていたが、イラク戦争においては航空作戦における11の任務領域の中で2番目に位置付けられていたという⁽¹⁹⁾。確かに、中央空軍が発表した資料では、1番目は航空優勢の確保、2番目が敵地上軍の撃破となっており⁽²⁰⁾、航空優勢の確保はど

(14) Tommy Franks, *American Soldier* (New York, NY: HarperCollins Publisher, Inc., 2004), p. 373.

(15) 米中央空軍の資料でも、イラク戦争における航空攻撃のうち、地上軍支援(kill-box interdiction/close air support)が78.4パーセント、フセイン体制の指揮・統治機構に対する攻撃が9.0パーセント、航空優越保持が7.2パーセント、大量破壊兵器関連の攻撃が4.2パーセント、固定目標攻撃が1.2パーセントで、地上軍支援が圧倒的に多いことがわかる。Assessment and Analysis Division, United States Central Command Air Forces, *Operation Iraqi Freedom - By The Numbers* (Shaw Air Force Base, SC, April 30, 2003), p. 5.

(16) Carl von Clausewitz, *On War*; eds. and trans. Michael Howard and Peter Paret (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1984), pp. 595-596.

(17) フランクスは、偵察の結果、バグダッド市内に展開するイラク軍は航空攻撃による破壊が可能な状態と判断したため、バグダッドを包囲してこれを防衛するイラク軍を外側から攻撃するのではなく、バグダッド市内の部隊をまず破壊する「インサイド・アウト」を提唱したという。Franks, *American Soldier*, p. 391.

(18) Howard D. Belote, "Paralyzed or Pulverized? The Fall of the Republican Guard," *Joint Force Quarterly*, issue 37 (second quarter, 2005), pp. 42-45, http://www.dtic.mil/doctrine/jel/jfq_pubs/0837.pdf.

(19) Wesley P. Hallman, "Airpower and Psychological Denial," *Joint Force Quarterly*, issue 37 (sec-

のような航空作戦を実施するにしても前提条件となるものであり、それを除いて考えれば、実質的には地上軍の攻撃が最も優先順位が高かったともいえよう。

さらに、ホールマンによると、湾岸戦争の航空作戦ではイラクの政治・軍事指導部に関連した目標の攻撃に重点が置かれ、一部ではこれのみで地上軍による攻撃が必要なくなることも期待されていたが⁽²¹⁾、イラク戦争ではむしろ航空攻撃によりイラク軍を崩壊させ、地上軍による進撃を容易にすることを目的としていた⁽²²⁾。また、ホールマンは、イラク戦争におけるイラク地上軍に対する航空攻撃は、物理的にイラク軍を破壊するだけでなく、攻撃を受けるイラク軍の戦意を奪うのに有用であったと指摘する⁽²³⁾。

これらを踏まえ、米空軍ドクトリンには見直しが必要とホールマンは主張する。彼によると、空軍のドクトリンにおいて「戦略的攻撃」は、「敵の重心を直接打撃することにより戦略的な成果を直接達成することを企図」するものであり、それは「敵の展開した軍事力を攻撃することなく目標を達成」することとされ、敵の地上軍を攻撃することは明示的に除外されている。しかし、こうした考え方はイラク戦争における実例と食い違っているとホールマンは指摘するのである⁽²⁴⁾。

2 緊急展開能力、状況認識能力と重装甲車両の役割について

(1) 戦略的スピードの重視とそのインプリケーションについて

現在の米軍、特に陸軍のトランスフォーメーションにおける課題の1つは、作戦を行う地域に、いかに早く部隊を展開し得るかという、戦略的なスピードの問題である。また、多くの場合、戦略的なスピードは装甲防御力や火力とのトレードオフの関係にあると認識され、これらを犠牲にしても前者を優先すべきかが論点となっている。

イラク戦争に限っていえば米国側に時期の選択権があり、いかに早くイラクに展開する

ond quarter, 2005), p. 35, http://www.dtic.mil/doctrine/jel/jfq_pubs/0737.pdf.

(20) Assessment and Analysis Division, *Operation Iraqi Freedom*, p. 4.

(21) 湾岸戦争後、米空軍が作成した報告書によると、航空作戦の計画者の考えでは、航空作戦の戦略的中核は、①指揮統制通信、②指導部関連施設、③NBC戦能力・兵器プログラム、④軍事支援施設、⑤弾道ミサイル発射機と支援インフラ、⑥電力、⑦精油所、⑧主要な橋梁、鉄道施設、であり、これには地上軍の攻撃は含まれていなかった。また、作戦計画者の中には航空作戦のみで戦争を終結できると期待するものもあり、これらに多大な関心が払われていたという。ただし、実際のソーティ数を見てみると、地上軍攻撃は全体の56パーセントを占め、上記の8つは15パーセントを占めるに過ぎなかったという。当事者の認識において地上軍攻撃は優先順位が低かったが、実際には大きな割合を占めたということと思われる。Thomas A. Keaney and Eliot A. Cohen, *Revolution in Warfare? : Air Power in the Persian Gulf* (Annapolis, MD : Naval Institute Press, 1995), p. 55.

(22) Hallman, "Airpower and Psychological Denial," p. 35.

(23) *Ibid.*, p. 37.

(24) *Ibid.*, p. 38.

かという戦略レベルでのスピードの制約はその分緩和されていたものと考えられる。実際に、米国は1年4カ月にもわたる入念な準備を経て戦争に臨んでいた。フランスによると、中央軍司令部でイラク戦争の準備が始まったのは2001年11月下旬⁽²⁵⁾、国防長官のラムズフェルドが中央軍司令官のフランスにイラク戦争計画の基となる作戦構想を準備するよう指示したのが始まりという⁽²⁶⁾。その後、中央軍司令部において戦争計画の準備が進められ⁽²⁷⁾、2002年夏には作戦実施のために必要なインフラストラクチャーの整備が開始⁽²⁸⁾、2002年冬以降、作戦のための州兵・予備役の動員が開始⁽²⁹⁾、さらに第3歩兵師団などのクウェートへの移動も同時期から始められた⁽³⁰⁾。米会計検査院(当時General Accounting Office, 現Government Accountability Office, GAO)は、陸軍と海兵隊の事前集積プログラムに関する報告書で、イラク戦争では戦力構築にかけられた期間が数カ月あったので展開スピードは必須ではなかったと指摘している⁽³¹⁾。それ以外にも、1991年の湾岸戦争以後、米軍は中東地域に訓練を含め駐留する機会があり(その名目で第3歩兵師団の一部を移動し得た)、必要なインフラストラクチャーを構築することができたことや、また隣国のクウェートを策源地とすることができたことなど、イラク戦争に特有の事情もあり、一般化は難しいともいえよう。

なお、イラク戦争では戦域への展開を計画的に実施できたので、展開の大部分を海上輸送により行うことができたことが特徴の1つといわれる。それ以前の作戦では、展開のために航空輸送に過度な負担がかかっていたことが指摘されていた。例えば、1999年のコソ

(25) フランスの自伝では、11月27日に突然ラムズフェルドから電話があったと書いている。Franks, *American Soldier*, p. 315. 一方、ボブ・ウッドワードの著作では、11月21日に大統領がイラクに取りかかることに決め、同日にラムズフェルドがイラク戦争に関する作戦構想が欲しいとフランスに連絡したとある。Bob Woodward, *Plan of Attack* (New York, NY: Simon & Schuster, 2004), p. 31. また、国防省ホームページ上の「本日の国防省」2001年11月27日にはラムズフェルド、マイヤーズが中央軍司令部を訪問したことになるので、日付としては、21日が正しいものと思われる。“Today in the Department of Defense, Tuesday, November, 27, 2001,” <http://www.defenselink.mil/today/2001/to20011127.html>.

(26) Franks, *American Soldier*, p. 315.

(27) *Ibid.*, pp. 315-431.

(28) 例えば、飛行場の建設、燃料パイプライン敷設、クウェート軍港改良、住居・倉庫施設などである。Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, p. 32.

(29) ウッドワードによると、2002年11月26日、フランスはラムズフェルドに対して所要戦力30万人の動員・展開の請求を送ったという。30万人に対して一斉に展開の通知を送ると、戦争の準備をしていることが内外に明らかになってしまい後に引けなくなるため、ラムズフェルドはブッシュ大統領に相談し、イラクに対する最後の査察の前に戦争をすると受け取られてはまずいので、30万人への通知を小分けにして、展開命令を発出することにしたという。結果、最初の動員・展開命令は、12月6日に出された。Woodward, *Plan of Attack*, pp. 231-234 および Franks, *American Soldier*, p. 409.

(30) Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, p. 76.

(31) General Accounting Office, *Military Prepositioning: Observation on Army and Marine Corps Programs during Operation Iraqi Freedom and Beyond*, GAO-04-562T, (Washington, DC, 2004), p. 3.

ボ空爆「同盟戦力」作戦においては、現地指揮官らが兵員・装備の移動に時間の掛からない航空輸送を要請したため、航空輸送能力に過大な負担がかかるとともに、海上輸送能力はほとんど活用されないという事態が生じた⁽³²⁾。また、2001年10月から行われたアフガニスタンでの「不朽の自由」作戦では当初航空輸送に大きく依存した⁽³³⁾。これらを踏まえ、米輸送軍は、イラク戦争については極力海上輸送を活用する方針を取った結果、海上輸送トン数は航空輸送トン数の9倍となったのである⁽³⁴⁾。

ただし、イラク戦争においても時間的な制約がなかったわけではない。まず、戦争の準備と見られるような大規模な部隊の移動は、同時並行的に行われていた外交によるイラクの大量破壊兵器問題解決の努力の信憑性を失わせること、また、戦争を行わないという決定がなされた場合に撤退が難しくなることなどから、早期に大規模な展開を開始することができなかった⁽³⁵⁾。

一方、現実問題として、戦略的なスピードを重視して整備されたストライカー旅団戦闘団 (Stryker Brigade Combat Team, SBCT) が期待通りの緊急展開能力を発揮しうるかという点も議論されている。例えば、GAOは報告書で、SBCTは4日間で地球上のどこにでも展開し得ることを目標としているが、実際にはこれは無理で、5日から14日ほどかかると指摘している⁽³⁶⁾。また、別の報告書でGAOは、ストライカー暫定装甲車がC-130輸送機により輸送可能であると陸軍は主張しているが、実際には、①19トンという重量のため気温や飛行場の標高などの条件により航続距離が著しく減少する（夏期の日中という条件では、アフガニスタンのバگرامやカブールからはストライカーを積んで離陸することさえできない）、②ストライカーの自重に加えて、付属品などで重量がわずかでも増えれば著しく航続距離が減少する、③付属装備、追加装甲、人員などはストライカー本体とは別に運搬する必要があり、輸送所要を増大させる、などの問題点を指摘している⁽³⁷⁾。

(2) 「戦場の霧」の問題

(32) Department of Defense, *Report to Congress, Kosovo/Operation Allied Force After-Action Report* (Washington, DC, 2000), p. 41, <http://www.defenselink.mil/pubs/kaar02072000.pdf>.

(33) United States Transportation Command, *2003 Annual Command Report* (Scott Air Force Base, IL, 2003), p. 8, <http://www.transcom.mil/annualrpt/2003acr.pdf>.

(34) United States Transportation Command, *2003 Annual Command Report*, p. 8.

(35) Woodward, *Plan of Attack*, p. 232; Eliot A. Cohen, *Supreme Command: Soldiers, Statesmen, and Leadership in Wartime* (New York, NY: Anchor Books, 2003), p. 235.

(36) General Accounting Office, *Military Transformation Realistic Deployment Timelines Needed For Army Stryker Brigades*, GAO-03-801, (Washington, DC, 2003), p. 5.

(37) General Accounting Office, *Military Transformation: Fielding of Army's Stryker Vehicles Is Well Under Way, but Expectations for Their Transportability by C-130 Aircraft Need to Be Clarified*, GAO-04-925, (Washington, DC, 2004), pp. 22-26.

戦略的なスピードの問題とあわせて、現在のトランスフォーメーションでの中心的な命題の1つは戦場認識能力の向上である。戦場認識能力が向上すれば、敵が気付く前、これと接触する前に攻撃を行い、大勢を決することが可能になり、必ずしも強力な装甲防御力と火力を持つ必要はなくなり、装甲防御力と火力を減らすことにより輸送所要を減少させ、戦略的なスピードの向上に資することができるとされる。その意味で、戦場認識能力の向上と装甲防御力と火力の問題、さらには戦略的スピードは相互に関連した命題であるといえよう。

この問題は現在でも論争の対象であり、批判的な見解も提示されている。そのなかでも、ダグラス・マクレガー(Douglas Macgregor) 退役陸軍大佐⁽³⁸⁾は、イラク戦での地上戦闘のほとんどが予期せず敵と出会う遭遇戦であったと指摘している。これを踏まえ、彼は完全な状況認識能力を持つことは、実現不可能な「幻想、あるいは妄想」に過ぎず、タイムリーな情報は非常に重要だとしても火力や機動力、装甲防御力の代替とはならないと主張する⁽³⁹⁾。

同様に、H・R・マックマスター(H. R. McMaster) 陸軍大佐は⁽⁴⁰⁾、技術の進歩によってデジタル地図上で友軍と敵のかなりが表示されるようになり、「戦場の霧」が大きく減

(38) マクレガーは、1976年陸軍士官学校卒業の騎兵科将校で、機甲騎兵部隊・機甲部隊に勤務。湾岸戦争では、73イースティングの戦いに参加した第2騎兵連隊第2騎兵大隊に作戦将校として参加(ブロンズスター勲章("V")を受章)。その後、訓練教義コマンド、第1歩兵師団第4騎兵連隊第1騎兵大隊長、陸軍参謀本部作戦部戦争計画課を経て、1995年からはCSISに陸軍フェローとして勤務。その間に、*Breaking the Phalanx: A New Design for Landpower in the 21st Century* (Westport, CT: Praeger, 1997) を執筆。同書が、冷戦期の構造を依然持ち続けているとして米陸軍を厳しく批判し、師団を基本とした編制を、より小さい戦闘機動群を中心としたものに改編するよう提言したため、激しい論争の対象となる。その後、諸兵科連合センター指揮統制戦闘研究所副所長、欧州連合軍最高司令部戦略計画課、同司令部統合作戦センター長、国防大学技術国家安全保障センター勤務。また、ヴァージニア大学から修士および博士号を得ており、陸軍士官学校社会科学部でも教鞭をとったことがある。なお、マクレガーとその著作の陸軍のトランスフォーメーションへの影響を分析したものに以下がある。Daniel S. Stempniak, "An Agent of Change or a Colonel Who Just Complained: A Case Study of Colonel Douglas A. Macgregor and His Book, *Breaking the Phalanx A New Design for Landpower in the 21st Century*" (Fort Leavenworth, KS: U.S. Army Command and General Staff College, 2003), <http://cgsc.cdm.oclc.org/coll3/image/66.pdf>.

(39) Douglas Macgregor, "Army Transformation: Implications for the Future" (prepared statement before the Committee on Armed Services, House of Representatives, 108th Congress, Washington, DC, July 15, 2004), p. 2, <http://www.house.gov/hasc/openingstatementsandpressreleases/108thcongress/04-07-15Macgregor.pdf>.

(40) マックマスターは1984年陸軍士官学校を卒業。湾岸戦争において、91年2月26日の73イースティングの戦いで第2機甲騎兵連隊第2騎兵大隊E騎兵中隊を率い、4倍の大きさのイラク軍戦車部隊を撃破した。Robert H. Scales, *Certain Victory: The U.S. Army in the Gulf War*, First Brassey's edition, (Washington, DC: Brassey's, 1994), p. 4. その後、94年から96年まで陸軍士官学校歴史学部で教鞭をとり、ベトナム戦争における大統領、国防省、統合参謀本部などによる戦争指導を分析した『職務怠慢』(*Dereliction of Duty: Johnson, McNamara, the Joint Chiefs of Staff, and the Lies That Led to Vietnam* (New York, NY: HarperCollins Publishers, 1997) を97年に出版して話題になった。2003年からは中央軍司令官付顧問団長、2005年4月からは第3装甲騎兵連隊長としてイラクに展開している。"3rd ACR Uncases Colors Symbolizing Return to Iraq," http://www.arcent.army.mil/news/archive/2005_news/april/uncases_colors.asp.

少しだが、戦争の本質として不確実性はなくなっておらず⁽⁴¹⁾、イラク戦争はそのことを示していると指摘する⁽⁴²⁾。そして、彼は、陸軍のトランスフォーメーションが、確実に状況を把握できるという想定を無批判に受け入れる上に成り立っていると批判する⁽⁴³⁾。例えば、SBCTは、敵の位置を完全に把握し、戦闘の時と場所を選択できるという想定に立つことによって、装甲防御力や攻撃力、走行時や夜間の射撃能力を犠牲にして軽量化を達成している指摘する。特に、市街地はセンサーの障害になるものが多く、隠蔽、欺瞞、奇襲を受けやすいにもかかわらず、SBCTがこうした地形での戦闘に最適化していると陸軍が主張するのは、ほぼ完全な状況認識能力を持ちうるという前提に立っているためであると説明する。また、陸軍が将来整備を目指しているオブジェクティブ・フォースについても同様な考え方が見られるとしている⁽⁴⁴⁾。

イラク戦争における戦場認識能力について、*On Point*は以下のような点を挙げている。

①開戦当初、米軍は敵の所在をかなり正確に把握していたが、その後の移動を正確に追跡することは困難であり、準軍隊にいたってはほとんど不可能であった、②敵部隊の所在はわかったとしても、その意図や即応態勢まではわからず、攻撃してみたら装備が無人のまま残されていただけだったということもあった、③イラク軍の身を隠す能力は、敵と接触せずにスタンドオフ攻撃を仕掛けることができると主張する人々を躊躇させるだろう、④戦術部隊の指揮官のほとんどは彼らが実施した攻撃は、攻勢作戦の一種で敵の正確な位置がわからない状況において敵との接触を求めて行う接敵機動 (movement to contact)⁽⁴⁵⁾であったと主張している⁽⁴⁶⁾、⑤戦術部隊指揮官の目となる偵察部隊もあったが、装甲防御力が弱いため、敵の攻撃による被害を恐れて活用されなかった⁽⁴⁷⁾。以上を総合すると、戦場認識能力は機能していたものの、敵に関する情報は完全なものではなく、SBCTやオ

(41) H. R. McMaster, "Crack in the Foundation: Defense Transformation and the Underlying Assumption of Dominant Knowledge in Future War," CSL Student Issue Paper, vol. S03-03 (November 2003), p. 21.

(42) *Ibid.*, p. 85.

(43) *Ibid.*, p. 54.

(44) *Ibid.*, pp. 55-57. その例としては、United States Army, *2004 Army Transformation Roadmap* (Washington, DC, 2004), p. 4-3.

(45) Headquarters, Department of the Army, *FM 3-0 Operations* (Washington, DC, 2001), pp. 7-17.

(46) ただし、*On Point* は、接敵機動であったとしても、当初の敵に位置は把握しており、またその後の移動もある程度追跡できており、敵とどこで遭遇するかある程度わかっていたはずであると指摘する。他方、米陸軍のドクトリンでは、陸軍のISR能力が向上し、敵の位置について全般情報を得ることができるため、師団・軍団レベルでは接敵移動を行う必要性は低減しているが、敵による地形の活用や、米軍が持つ情報の正確さを低下させようとする敵の対抗手段などから、より小さな戦術部隊が接敵機動を行う必要性は残っているとす。Headquarters, Department of the Army, *FM 3-90 Tactics* (Washington, DC, 2001), pp. 4-2, https://atiam.train.army.mil/soldierPortal/atia/adlsc/view/public/4624-1/fm/3-90/fm3_90.pdf.

(47) Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, pp. 423-424.

ブジェクティブ・フォース構想で前提とされているような、敵と接触する前に交戦し、大勢を決するというものではなかったことを示すものであろう。

なお、SBCTの戦闘力について疑問を呈する者もいる。マグレガーはストライカー暫定装甲車では敵の攻撃に耐えられず、その有用性は平和支援や準軍事的な任務に限られると主張した。その証左として、実際に中部イラクで戦闘が勃発した際には、ストライカーは近接戦闘で損害を出すことを避けるため北部に置かれたと指摘する。また、マグレガーは、SBCTは戦闘を予定する地点まで移動した後は下車戦闘を想定しているが、この方法では敵の火力により損害が多くなると指摘している⁽⁴⁸⁾。

さらに、SBCTやオブジェクティブ・フォースで実現される状況認識能力そのものについても問題が指摘されている。マックマスターは、2020年頃の技術が完全に機能したとしても、戦力の隠蔽や分散、欺瞞を行う敵地上部隊を無人機(Unmanned Aerial Vehicle, UAV)などで上空から探知することは、不可能でなくとも困難であるとするランド研究所の報告書⁽⁴⁹⁾を引用して、SBCTやオブジェクティブ・フォース構想は希望的観測に立脚していると主張する⁽⁵⁰⁾。さらに、マックマスターは、完璧な状況認識能力を前提にすることにより、中央で作成された「完璧な」計画の完全な実施を現場レベルに要求し、これからの逸脱を認めないといった過度の中央集権化と計画の硬直化がもたらされると指摘し、状況の変化への柔軟な適応能力と作戦の実施面での分散化が軍事作戦においては最も必要であるとして、そのためにも、状況認識能力の不完全性を前提とした構想に戻るべきであると主張する⁽⁵¹⁾。

(48) Macgregor, "Army Transformation," pp. 3-4. また、元陸軍戦略大学校長のロバート・スケールズ(Robert H. Scales, Jr.)は、乗車戦闘の方が、下車戦闘より損耗率が低いと指摘している。"The Future of the United States Army" (unedited transcript from a tape recording, American Enterprise Institute, Washington, DC, April 11, 2005), http://www.aei.org/include/event_print.asp?eventID=1011.

(49) John Matsumura et al., *Exploring Advanced Technologies for the Future Combat Systems Program* (Santa Monica, CA: RAND, 2002), p. 59.

(50) McMaster, "Crack in the Foundation," p. 59. なお、マックマスターは、こうした将来戦における情報の確実性の想定は、国防長官や統合参謀本部議長の意向を受けたもので、そもそも結論が先にありきであったと指摘する。彼によると、統合実験や演習のプロセスは、「裁判に入る前に、まず評決を！」という『不思議の国のアリス』に出てくる王様の言葉を想起させるものであり、2002年に実施されたミレニアムチャレンジ2002も、敵(赤部隊)の行動について不確実性をなくすように、あらかじめ赤軍の行動を制約したものであったため、赤部隊指揮官を務めたポール・ヴァン・ライパー(Paul Van Riper)退役海兵隊中將は赤部隊指揮官の役を降りたという。これは、青部隊が勝利するように筋書きされたもので、青部隊は火力や装甲防御力を情報優越と引き替えに落としたので、青部隊が勝利するためには、ほぼ完全な状況認識能力を保持していることにすることが必要であったとマックマスターは説明する。McMaster, "Crack in the Foundation," pp. 82-83; "Wake-up call," *The Guardian*, September 6, 2002, <http://www.guardian.co.uk/Iraq/Story/0,2763,787017,00.html>; "War Games Rigged? General Says Millennium Challenge 02 'Was Almost Entirely Scripted,'" *Army Times*, August 16, 2002, <http://www.armytimes.com/story.php?f=1-292925-1060102.php>.

近年の技術革新にもかかわらず「戦場の霧」が完全に解消されることはないと主張する論調の基本にあるのは、「地上」という戦場空間の特性に関する認識である。前述のマグレガーも、「地上戦は本質的に混沌としている」とし、技術やシステムによって、非戦闘員が住む町や都市、複雑な地形で不意打ちにあうことを未然に防ぐことはできないと主張する⁽⁵²⁾。また、マックマスターは、「地上」は知識、移動、通信を妨げる極めて無秩序な環境であるとし、奇襲を受けるリスクはいたる所に存在し、指揮統制は脆弱になりやすいとし⁽⁵³⁾、一般的に均質な空間であるため状況認識が容易とされる海、空さえ、陸地に近づけば近づくほどそれが困難になると指摘する⁽⁵⁴⁾。

さらに、重要な問題として議論されているのは、技術的な手段によっては測ることができない、敵の意図や敵の反応である。*On Point* は、情報・監視・偵察 (intelligence, surveillance and reconnaissance, ISR) について論じた結論として、イラク戦争は「敵にも議決権がある (Enemy gets a vote)」ということわざを想起させるものであり、「敵」という要素故に戦闘作戦には不明確さは永遠につきまとうとしている⁽⁵⁵⁾。同様に、ウィリアムソン・マーレー (Williamson Murray) とロバート・スケールズ (Robert H. Scales, Jr.) は、イラク戦争に関する著作で、無傷なのに戦闘を放棄した正規軍部隊がいた一方で、最後の兵まで戦ったフェダイーン部隊もいたとして、敵の意図や戦闘意欲を理解することの重要性を強調し、それには技術はほとんど関係ないと指摘する⁽⁵⁶⁾。

上で紹介したような論者は、技術の進歩により戦場における不確実性を完全には解消することはできないという立場に立つがために、敵との近接戦闘に巻き込まれた場合でも、味方の損害を極小化し、敵を撃破できる能力を持つために十分な装甲防御力と火力、機動力が必要であるという結論に至っているものと考えられる。

これに関連して、重装甲車両のイラク戦争での役割について、第3歩兵師団が戦後作成した報告書は以下のように指摘している。航空阻止、近接航空支援、砲撃などにより、敵の戦力を減殺してそれに続く作戦のために有利な条件を整えることはできるが、勝利を得るためには敵に接近、これを撃破することが必要になる。そして、味方に損害を出すことなくこれを行うことができるのが装甲戦闘車両であるとする。そして、同報告書は、イラク軍が攻撃してくる米軍重装甲車両に打撃を与えることができなかったことが米軍の勝利

(51) McMaster, "Crack in the Foundation," p. 97.

(52) Macgregor, "Army Transformation," p. 2.

(53) McMaster, "Crack in the Foundation," p. 60.

(54) *Ibid.*, p. 40.

(55) Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, p. 424.

(56) Williamson Murray and Robert H. Scales, Jr., *The Iraq War: A Military History* (Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2003), p. 240.

の大きな原因の1つとする。そして、今後も高脅威下に軽装甲車両を投入するべきではなく、強力な重装甲戦力を保持する必要があると提言している⁽⁵⁷⁾。

なお、イラク戦争後の安定化作戦における損害が大きいこともあり、あらためて重装甲車両の意義が見直されているようである。2005年4月11日にアメリカン・エンタープライズ・インスティテュート(American Enterprise Institute, AEI)で行われた米陸軍の将来像に関するシンポジウムでは、イラク戦争後の安定化作戦の段階で機甲部隊を現地に持っていかなかったことは間違いではなかったかという指摘に対して、パネリストからも同意があった⁽⁵⁸⁾。また、レキシントン研究所副所長のダニエル・ゴア(Daniel Gouré)は、市街戦では装甲車両は有効に活用できないという主張があるが、それは正しくないとして以下のように述べた。まず、イラク戦争終結後、米軍は戦車と歩兵戦闘車の大半を引き上げたが、2003年夏に戦闘が勃発した際には、「軽い」戦力で対応したのではなく、急遽戦車100両をイラクに戻すことで対応した。また、機甲部隊によるバグダッド中心部への突入作戦「サンダーラン」でも撃破された米軍車両はなかったことから、市街戦において随伴歩兵のない装甲車両は脆弱であるという説は誤りであるとしている。さらに、イラク戦争後の安定化作戦を遂行するなかで、結果的に米軍は再び装甲防御力を強化していると指摘する。ハンビーやストライカーなども装甲が強化され、現在開発中の将来戦闘システム(Future Combat System, FCS)も本来は敵と接触する前に攻撃を行う想定に基づき装甲を軽くしていたが、実際には装甲を強化するよう設計を変更せざるを得なくなっているという。また、ファルージャに対する攻撃においても、戦車と歩兵戦闘車が攻撃の先鋒となった。そして、緊急展開能力を向上するために戦力を「軽く」する必要性は認識されているものの、イラクで生じている戦闘に対処するために結果的に「重く」なっているのが現状であると指摘する⁽⁵⁹⁾。

3 陸軍の編制の在り方

(1) 戦域レベルにおける指揮階梯

米軍のトランスフォーメーションにおいては陸軍の編制方法をどのように変えるかという問題も中心的な課題の1つである。このなかで、師団を中心にした陸軍の編制は状況に

(57) Third Infantry Division (Mechanized), *Third Infantry Division (Mechanized) After Action Report Operation Iraqi Freedom* (Fort Stewart, GA, July 2003), p. 88.

(58) 例えば、スケールズである。“The Future of the United States Army.”

(59) Daniel Gouré, “Rolling Thunder: Reports That the Era of Heavy Armor is Over Turns Out to be Premature,” *Armed Forces Journal* (May 2005), pp. 24-27.

適合していないという議論がなされている。ラムズフェルド国防長官は、これまでの陸軍の編制は、19世紀に生まれた「ナポレオン式の師団編制(Napoleonic divisional structure)」であると指摘し、陸軍は自己充足した、自立的で、どの師団長の下にも配置できる旅団を中心とした21世紀型の「モジュラー陸軍」に移行しつつあると説明する⁽⁶⁰⁾。

On Point は、原子力空母USSロナルド・レーガン(2003年就役)と米海軍最古の軍艦USSコンステイテューション(1798年就役)が「軍艦」(ship)といっても同じものではないのと同様、現在の「師団」や「軍団」も付与されている「機能」が違うため、ナポレオン時代のものと同列に扱うことは間違いであるとする⁽⁶¹⁾。例えば、現在では軍団は兵站機能を持っているが、第2次世界大戦時には軍団に兵站機能はなかった。また、第2次世界大戦時には野戦軍は戦局に応じて投入できる直轄戦力を持っていたが、イラク戦争中、米第3軍司令官として連合軍地上部隊指揮官(Combined Force Land Component Commander, CFLCC)を務めたデービッド・マッカーナン(David McKiernan)陸軍中將には手元に控置した予備戦力はなかった⁽⁶²⁾。

On Point はそれぞれの指揮階梯は有益だったと指摘する。軍レベルであるCFLCCは、戦域全体の事項、統合軍内の他の機能別構成部隊との調整、戦場管理、統合ISRの監督、資源配分の優先順位付け、戦域レベルの兵站、RSOI(reception, staging, onward movement and integration——当該戦域に到着した兵員・装備などの受け入れ、中間集結地での集結、前線への移動、受け入れ先部隊への統合)などを実施していた。そのため、マッカーナン中將は、第5軍団や第1海兵遠征軍などの中間の階梯なしにその下の師団などをCFLCCが直接統制することは可能であったか、という問いに「そうは思わない」と述べている。一方、逆に軍団レベル、すなわち第5軍団や第1海兵遠征軍が、CFLCCが実施していたような戦域全体にまたがる事項を処理することも不可能であったと*On Point* は指摘する⁽⁶³⁾。

さて、指揮の階梯に関連してイラク戦争で注目されるのは、湾岸戦争の際と異なり、中央軍司令官とは別に、その下に地上戦全体を指揮・統制する単一の指揮官がCFLCC(マッカーナン第3軍・中央陸軍司令官)として置かれたことである⁽⁶⁴⁾。フランクスは中央軍司令官として、大統領や国防長官や統合参謀本部議長へのブリーフィングや、戦争全体

(60) Donald H. Rumsfeld, "FY 2005 Defense Budget Testimony (as Prepared)" (prepared testimony of Secretary of Defense Donald H. Rumsfeld for the Senate and House Armed Services Committees, 108 Congress, February 4, 2004), <http://www.defenselink.mil/speeches/2004/sp20040204-secdef0842.html>.

(61) Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, p. 396.

(62) *Ibid.*

(63) *Ibid.*, pp. 396-397.

(64) 通常、統合軍のなかには、陸海空海兵隊ごとの軍種別構成部隊(service component command)が置かれており、各軍から当該統合軍に配置された戦闘部隊の訓練、補給などを担当している。なお、戦時において、統合軍より下のレベルで、同種の機能を持つ2つ以上の軍の部隊を統合して運

の指揮などを行う必要があるため、地上部隊指揮官の役割に拘束されることは避けたものと思われる。このことについてフランクは、イラク戦争のために形成された同盟軍は1人の人間が戦術レベルで指導するには、大きく、複雑過ぎるとして、戦争の指揮は、フランク自身が直接行うのではなく、隷下の指揮官を通じて行うべきであったと述べていた⁽⁶⁵⁾。

1991年の湾岸戦争では対照的に、中央軍司令官のノーマン・シュワルツコフ(Norman Schwarzkopf)陸軍大将が、地上作戦全体を指揮する統合軍地上部隊指揮官(Joint Force Land Component Commander, JFLCC)を別に置かず、自らその役割を兼ね、中央陸軍(隷下に英仏軍含む)と中央海兵隊を直接指揮下に置いた。すなわち、中央軍司令官のレベルまで上らないと地上作戦の統合は達成されていなかったのである。さらに、アラブ諸国の部隊については、サウジアラビアのハリド・ビン・スルタン(Khalid bin Sultan)陸軍中將の指揮下に置かれ、シュワルツコフの指揮下にもなかった。このようなアレンジメントがなされた理由として、米陸軍の公刊戦史 *Certain Victory* は、①サウジアラビアがアラブ諸国から参加している全部隊を指揮下に置くことを主張しており、他方、アラブ諸国の軍隊を米軍人の指揮下に置くことは政治的にも問題があったこと、②中央軍司令官としての司令部の他に、JFLCCを設置すればそのための司令部を別途設置することが必要になることを挙げている⁽⁶⁶⁾。ただし、シュワルツコフがJFLCCを兼ねたことにより、シュワルツコフとその司令部に過度の負担となり、結果として地上戦における連携が円滑に行われず、クウェートを占領していた共和国防衛隊を包囲殲滅することができなかったという批判もなされている⁽⁶⁷⁾。

一方、地上戦とは対照的に、航空作戦については第9空軍・中央空軍司令官のチャック・ホーナー(Chuck Horner)空軍中將が、統合軍航空部隊指揮官(Joint Force Air Component Commander, JFACC)として統合軍内の航空作戦の指揮を一元的に行った。なお、このような形で単一の指揮官の下で複数の軍種の航空部隊が統合して航空作戦を行ったのは、これは初めてとされる⁽⁶⁸⁾。他方、ドクトリン上も、JFACCについては、「統合軍指揮

用することが必要の際には、その作戦を指揮するための機能別構成部隊(functional component command)が置かれることがある。例えば、空軍、海軍、海兵隊による航空作戦を一体として指揮するために、統合軍航空部隊指揮官(JFACC)が置かれるなどである。Chairman, Joint Chiefs of Staff, *Joint Publication 0-2 Unified Action Armed Forces (UNAAF)* (Washington, DC, 2001), pp. V-16-20, http://www.dtic.mil/doctrine/jel/new_pubs/jp0_2.pdf.

(65) Franks, *American Soldier*, p. 461.

(66) Robert H. Scales, *Certain Victory: The U.S. Army in the Gulf War*, First Brassey's edition, (Washington, DC: Brassey's, 1994), pp. 140-141.

(67) Damian J. McCarthy and Susan A. Medlin, "Two Hats for the Joint Force Commander?" *Joint Force Quarterly*, no. 25 (Summer 2000), pp. 91-98, http://www.dtic.mil/doctrine/jel/jfq_pubs/1525.pdf; Murray and Scales, *Iraq War*, p. 12.

官は、通例、JFACCを指定する」(*Joint Publication 3-0 Doctrine for Joint Operations*)とされるが⁽⁶⁹⁾、JFLCCを含めたその他の機能別構成部隊指揮官についてはそのような記述はなされておらず、ドクトリン上もJFACCとJFLCCについては扱いが異なるという指摘もなされていた⁽⁷⁰⁾。

ただし、第3軍・中央陸軍をCFLCCに指定したといっても、第3軍・中央陸軍は陸軍の組織であり、CFLCCとして機能するためには補強が必要であった。アフガニスタンにおける「不朽の自由」作戦にともない、第3軍・中央陸軍がフランス中央軍司令官よりCFLCCの指定を受けたのは2001年10月であった⁽⁷¹⁾。イラク戦争に向けては、2002年秋頃から、平時の充足率は定員の約半分とされる司令部ポストの完全充足とともに、海兵隊や空軍、英軍からの要員多数の第3軍司令部へ配置が行われた。その中で、ロバート・ブラックマン (Robert Blackman) 海兵隊少将が参謀長として、ダニエル・リーフ (Daniel Leaf) 空軍少将が航空部隊との調整のため、また、アルバート・ホイットリー (Albert Whitley) 英陸軍少将が英軍担当CFLCC上級顧問としてCFLCC司令部に配置された⁽⁷²⁾。

なお、陸軍のトランスフォーメーションにおいては、旅団・師団・軍団という既存の階梯を、それぞれ、行動単位 (Unit of Action, UA)、運用単位X (Unit of Employment, X, UEx)、運用単位Y (Unit of Employment, Y, UEy) の3つに再編するとされていた。その中で、UEyには、軍団以上の陸軍の組織の機能が統合され、統合軍に割り当てられた陸軍戦力の準備、維持、訓練、装備、管理、支援という統合軍陸軍構成部隊 (Army Service Component Command, ASCC) としての役割⁽⁷³⁾を担うとともに⁽⁷⁴⁾、大規模な戦闘作戦においては、JFLCCとして海兵隊を含めた地上部隊を作戰統制することもできるとされていた⁽⁷⁵⁾。イラク戦争において、第5軍団と第3軍が果たしていた機能の両方を果たすことが期待されていたものと思われる。

(68) James A. Winnefeld and Dana J. Johnson, *Joint Air Operations: Pursuit of Unity in Command and Control, 1942-1991* (Annapolis, MD: Naval Institute Press, 1993), p. 107.

(69) Chairman of the Joint Chiefs of Staff, *Joint Publication 3-0 Doctrine for Joint Operations* (Washington, DC, 2001), p. II-17, http://www.dtic.mil/doctrine/jel/new_pubs/jp3_0.pdf.

(70) McCarthy and Medlin, "Two Hats for the Joint Force Commander?" p. 92.

(71) Richard W. Stewart, *The United States Army in Afghanistan: Operation Enduring Freedom, October 2001-March 2002* (Washington, DC: US Government Printing Office, 2003), p. 19.

(72) Fontenot, Degen and Tohn, *On Point*, p. 42.

(73) Headquarters, Department of the Army, *FM 100-7 Decisive Force: The Army in Theater Operations* (Washington, DC, 1995), p. 2-6, https://atiam.train.army.mil/soldierPortal/atia/adlsc/view/public/4858-1/fm/100-7/fm100_7.pdf.

(74) 例えば、戦域安全保障協力 (TSC)、他の軍種に対する支援、統合・連合訓練・演習、陸軍・地上軍の問題に関する統合軍指揮官へのアドバイス、(ある任務に適した) 陸軍戦力の選定、プログラム・予算要求・執行関連情報の把握、戦域通信アーキテクチャが挙げられている。United States Army, *2004 Army Transformation Roadmap*, p. 3-7.

(75) United States Army, *2004 Army Transformation Roadmap*, p. 3-7.

なお、戦域全体の地上作戦の指揮と地上部隊の戦力の維持、そして戦術部隊を直接指揮することを同時に両立させることの困難性については、マッカーナン中將も上で言及している。また、欧州陸軍・第7軍司令官のバーウェル・ベル(Burwell B. Bell)陸軍大將は、統合軍に対するフォースプロバイダーとしての役割を担うASCCを陸軍の指揮階梯からなくしてしまうことは無理であると指摘している⁽⁷⁶⁾。2004 Army Transformation Roadmapは、統合軍指揮官を支える戦域レベルの司令部の構想は現在開発中であるとしていたが⁽⁷⁷⁾、これら2つの指揮階梯でこれまで実施していた任務をUEyという1つの階梯によって実現するための仕組みをどのように今後構築していくかが注目される⁽⁷⁸⁾。

(2) 師団編制の変更、旅団のモジュール化

イラク戦争では、旅団レベルの部隊が自律した単位として、広範囲に分散して作戦を実施したことが特徴の1つといわれる。第3歩兵師団が戦争後に作成した報告書では、600キロメートルにわたる継続的な作戦の結果、同師団の各旅団はそれぞれが最大200キロメートル離れて行動することになったという。そのため、各旅団には、広い地域に分散して行動することを可能とするための師団直轄の支援部隊——工兵、砲兵、防空、憲兵、兵站など——が作戦開始前にあらかじめ割り当てられ、平時は約3,700名の兵員数が約5,000名まで拡大していた⁽⁷⁹⁾。

現在、米陸軍は、トランスフォーメーションの一環として、師団を構成する旅団の旅団戦闘団(行動単位)(Brigade Combat Team [Unit of Action], BCT [UA])への改編を進めている。これまで師団や軍団にあった能力をBCT(UA)に移し、戦力パッケージ化、継戦能力、戦闘指揮、状況認識能力それぞれを向上させるものである。これは、これまで旅団の編制はその部隊毎に異なり、「標準」と呼べるものはなかったものを、重(機甲・機

(76) Burwell B. Bell and Thomas P. Galvin, "In Defense of Service Component Commands," *Joint Force Quarterly*, issue 37 (second quarter 2005), pp. 96-104, http://www.dtic.mil/doctrine/jel/jfq_pubs/1737.pdf.

(77) United States Army, *2004 Army Transformation Roadmap*, p. 3-6.

(78) なお、2005年9月30日、米陸軍は、指揮階梯に関するこれまでの検討作業を踏まえ、今後の指揮階梯を「軍(army)」、「軍団(corps)および師団(division)」、「旅団戦闘団(brigade combat team)」、「大隊(battalion)」とすることを発表した。これによると、UA、UEx、UEyといった用語は「作業用の用語(working terms)」であり、検討作業が完了したので、これらを、耳に馴染みのある軍団や師団といった用語に戻したという。なお、UAは旅団戦闘団に、少將級UExは師団に、中將級UExは軍団に、UEyは軍とされる。なお、軍団については、第1軍団、第3軍団、第18空挺軍団が米本土に残り、軍については、北方陸軍(第5軍)、南方陸軍(第6軍)、欧州陸軍(第7軍)、中央陸軍(第3軍)、太平洋陸軍とされた。上からわかるとおり、最終的には軍と軍団が別個の指揮階梯として残されたことになる。"The Army's Modular Forces: Modular Force Initiative," <http://www.army.mil/modularforces>.

(79) Third Infantry Division (Mechanized), *Third Infantry Division (Mechanized) After Action Report Operation Iraqi Freedom*, pp. 5-6; Tommy Franks, *American Soldier*, p. 472.

械化) BCT (UA)、ストライカーBCT (UA)、軽(歩兵) BCT (UA) の3種類を標準とするものに改編していくものである⁽⁸⁰⁾。なお、BCT (UA) への改編は、イラク戦争でバグダッドへの進軍において中心的な役割を担った第3歩兵師団を皮切りに2004会計年度に開始された。現役部隊については、2007会計年度末までに10個ある現役師団全ての改編を終了し、もともと33個あった旅団を43~48個のBCT (UA) に増やす計画である⁽⁸¹⁾。

なお、旅団数を増やす関係で個々の旅団がこれまでより小さくなる点について陸軍は、既存の旅団戦闘団より小型化されるものの、これと同様の戦闘力を維持するとしている。しかしながらこの点について懸念を表明する者もある。マグレガーは、表に示すように、冷戦終結後から米陸軍の旅団はすでに装備・兵員の面で規模が縮小しており、さらに小さくするのは危険であると指摘する。

表 機械化歩兵旅団の装備・兵員数の変遷 (1994~2004年)

	1994年	1998年	2004年	増減数	増減率 (%)
M 1 戦車	67	53	56	▲11	▲16
M 2 /M 3 歩兵戦闘車	149	121	76	▲73	▲48
歩兵分隊	72	54	36	▲36	▲50
120mm迫撃砲	20	14	14	▲6	▲33
155mm砲	24	18	16	▲8	▲33
兵員	4,900	4,709	3,700	▲1,300	▲26

(出所) Douglas Macgregor, "Army Transformation: Implications for the Future" (prepared statement before the Committee on Armed Services, House of Representatives, 108th Congress, Washington, DC, July 15, 2004), p.4.

マグレガーは、旅団に独立した戦闘力を求めるのであれば、イラク戦争における第3歩兵師団のようにむしろ強化する必要があると述べている⁽⁸²⁾。これに対して、小型の旅団を多数揃えるより、むしろ、5,000人から5,500人の独立した単位、准将が指揮する戦闘機動群 (Combat Maneuver Group) を基本とすることを提案している。その理由として彼は以下の点を挙げる。第1に、歴史的には旅団以上の師団あるいは軍団レベルで処理されてきたような任務が旅団に任されるようになっており、大佐が指揮する旅団では人的資源の面で荷が勝ちすぎること、第2に旅団の規模を小さくすると継続的な戦闘ができなくなる

(80) 陸軍参謀本部のG-3 戦力管理部長のデービッド・ロールストン (David C. Ralston) 陸軍少将は、「数年前まで、本当に標準と呼べる部隊はなく、すべて部隊のデザインは異なっていた。そこに新しい参謀総長がやってきて、数種類のデザインに絞ることにして、プラグ・アンド・プレイ型の陸軍となるようにこれを真に標準化しようとした」と述べている。"The Future of the United States Army."

(81) United States Army, 2004 Army Transformation Roadmap, p. 3-2.

(82) Macgregor, "Army Transformation," p. 5.

ことである⁽⁸³⁾。

なお、マクレガーのいう「戦闘機動群」構想は、師団を中心とした編制を、より自立的な旅団を中心とする編制に変えるという点では、現在陸軍がトランスフォーメーションの一環として取り組んでいる改編と共通している。ただし、現実の改編事業が、1個師団から捻出できる旅団数を3個から4ないし5個に増やして(そのため1個旅団の規模は小さくなる)、イラクでの安定化作戦などに投入できる戦力を確保しようとしているところ、むしろマクレガーは逆に個々の旅団は強化すべきとしているのが違いであると思われる。なお、各旅団のBCT(UA)への改編については、2003年に第3歩兵師団で着手されてからも、すでに編制も変化しており、イラクでの安定化作戦の成果なども踏まえてどのような変化がありうるか注目される⁽⁸⁴⁾。

結論

本研究では、米国の国防省、軍の研究教育機関や専門家、民間のシンクタンクや専門家などが、イラク戦争の軍事的教訓をどのように解釈し、米軍のトランスフォーメーションにどのように適用すべきだと考えているかを分析しようと試みた。その中でも、戦争当初に一般に抱かれていたイメージと異なる指摘を特に取り上げ、その論点を明らかにするとともに、イラク戦争に関する研究報告書も参照しつつ、極力その妥当性も確認しようと務めた。

なお、イラク戦争には四軍が全て参加しているが、本稿はそのなかでも陸軍の問題を中心に扱っている。なぜならば、イラク戦争ではバグダッドへの進軍などで陸軍が中心的な役割を担い、現在でも戦後の安定化作戦による陸軍に対する大きな負担をどのように支えるかが重要な問題となっているからである。さらに、現在陸軍はイラク戦争の直後に就任したスクーマーカー参謀総長の下で抜本的な改革を進めつつあり、その中にはイラク戦争の

(83) *Ibid.*, p. 6; Douglas A. Macgregor, *Transformation under Fire: Revolutionizing How America Fights* (Westport, CT: Praeger Publishers, 2003), pp. 124, 128.

(84) ピーター・ベイヤー(Peter C. Bayer, Jr.)陸軍中佐は、BCT(UA)への改編作業が最初に着手された第3歩兵師団においてどのような変化があったかに関する研究で、①従来、旅団が3個機動大隊(歩兵・機甲)を基幹としていたものが2個機動大隊に削減され、BCT(UA)全体の兵員数が従来の3,766人から2,611人に削減された、②BCT(UA)固有の火力(砲兵大隊)もM109パラディン18門から12門に削減されたことなどを挙げ、改編後のBCT(UA)は火力や兵力の面で高強度紛争には不十分であると指摘した。しかし、その後の2004年2月には一旦決定された編制が変更され、その結果、1個機甲偵察大隊が追加され、固有の火力も12門から16門へ上方修正され、BCT(UA)全体の兵力も2,611名から3,757名になったという。Peter C. Bayer, Jr., "Optimizing the Unit of Action Based Mechanized Infantry Division for High Intensity Conflict," USAWC Strategy Research Project (Carlisle Barracks, PA: US Army War College, 2004), pp. 3, 4, 20-22.

教訓としてあげられるものに、今後の改革に重要なインプリケーションを持つものがあると考えられたからである。

以上のような問題意識に基づき、第1節「イラク戦争における勝利とイラク軍崩壊の原因をめぐる議論」では、イラク戦争における低コストの勝利の原因について、米軍の高い能力だけではなく、イラク軍側の能力の低さに求める見解を検討した。次に、イラク戦争における航空攻撃の主目的が開戦初期の中枢への攻撃により敵を「麻痺」させることにあるより、むしろ力点はイラク軍主力の撃滅にあったと指摘した。次に、第2節「緊急展開能力、状況認識能力と重装甲車両の役割について」では、状況認識能力の向上により装甲防御力、火力、機動力を少なくすることにより緊急展開能力を向上させるという考え方がイラク戦争の教訓に鑑み、妥当しているか検討した。最後に、第3節「陸軍の編制の在り方」では、イラク戦争において、旅団、師団、軍団、軍という指揮階梯がどのように機能したか、湾岸戦争との比較をしつつ、分析した。以上を踏まえ、イラク戦争において米軍の作戦スピード、統合の深化、優れた情報、精密交戦能力の進歩などがイラク戦争での勝利の重要な要素であることはもちろんであるが、それだけではなく、地上での状況認識能力の制約、「敵」の理解の重要性、敵主力撃破の必要性、重装甲車両の有用性などの点で、いわゆる過去の「伝統的」な戦争との重要な共通点が見られるのも事実であることがわかったといえる。

(きくちしげお 研究部第1研究室主任研究官)